

2023. 3. 5. 主日礼拝説教  
聖書：ルカによる福音書17章11～19節  
『そこへ行く途中で』

本日の聖書の箇所には「重い皮膚病を患っている十人の人をいやす」という小標題が掲げられています。この「いやし」の物語は、単なる奇跡物語としてのいやしを語るだけには終わってはいません。ここでは、十人のハンセン病を患っている人の中から、ただひとりのサマリア人だけが肉体的いやしだけでなく、霊的ないやしを得たというストーリーなのです。

当時、ハンセン病は伝染性の強い病いとされ(実際は違います)、一度患者と認定されれば、他の人に近づくことさえ厳しく禁じられていました。それゆえ12-13節では「遠くの方に立ち止まったまま、声を張り上げて」と記されます。人が人に近づくこと、それ自体を罪と定めるような社会は間違った社会であるとルカは語ります。

このような環境の中であって、初代教会は閉め出された患者たちの介護・治療そして「こころのケア」を中心に活動していました。それは何よりもイエスの側からの関係性の迫りがあったという「証言」の採用でした。

13節の「イエスさま、先生、どうか、わたしたちを憐れんで下さい」という叫びは胸を打ちます。憐れんでくれという求めは、身体だけでなく「こころの回復」をも意味しています。

それは具体的には現代に通ずる言葉で表現すると「緩和ケア」なのかと思えます。この行為こそが他宗教を押し分け、キリスト教が地中海世界に浸透・拡散して行った基盤であり、福音の質そのものであったのです。

それでは、福音書の語る当時のケアから現代に至る緩和ケアを通して、わたしたちは何を読み解き、何を学び得るのでしょうか。初代教会の当時から実はケアの基本的な考え方は、患者と家族が可能な限り人間らしく快適な生活を送れるということでした。それは以下の五項目です。

- 1,人が生きることを尊重し、誰にも例外なく訪れる「死への過程」に敬意を払う。
- 2,死を早めることも、死を遅らせることもしない。

- 3,痛みやその他の不快な身体症状を緩和する。
- 4,精神的・社会的な援助を行い、患者に死が訪れるまで、生きていることに意味を見出せるようなケア(これを「霊的ケア」という)を行う。
- 5,家族が困難を抱えてそれに対処しようとするとき及び患者の療養中から死別した後まで家族を支える。

福音書の「いやし」の記事には上記いづれの痛みに対しても初代教会の対処が描かれています。特に重点を置いたのが「霊的ケア」でした。信仰とはどのような状況に置かれたとしても「あなたは決して孤独ではない」という迫りと気付きなのだと宣言するのです。

この物語は十人の患者がイエスと出会って、その途中で身体的にいやされたという内容です。しかし、その中で一人だけが自分の人生を十分に生きたと思えるように自らの死を受容出来るに至ったという内容でもあります。

わたしたちは他者の命や魂を救うなどということは出来ません。けれども、わたしたちキリスト者に出来ることは一つだけあるのです。それは、死と向き合うのではなく、今を生きているまさにその人に寄り添うことを尊重することなのです。その途中で、ひょっとしたら十人に一人であったとしても、死を受容される方の一助になり得るのかも知れないと思うのです。